

高雄への機上である。台北の乗り継ぎ時にトラブルがあり2時間、桃園国際空港で過ごした。機は台湾の西海岸線を飛行している。機内から台湾山脈の険しい山並みは見ることができない。これまで、何回かの台湾への旅行では、高雄に行くことができなかった。北回帰線より南にある亜熱帯の高雄。期待に胸が膨らむ。

機内は狭く、人がまばらである。台北高雄路線はドル箱路線

として有名である。おそらく台湾新幹線が1~2ヶ月前に開業した影響であろう。

高雄の空港には長庚大学高雄長庚記念医院の消化器外科 沈教授の出迎えを受けた。台湾の先生たちはいつも暖かい。医員の李先生の車で市内へ向かう。市内に向かうと、すぐに、東帝士85ビル(378 m)という、高層ビルが目に入る。ロケットの様な形をしたビルで、台湾ではTAIPEI101(508 m)の次に高い

ビルであると聞かされた。高雄の街並みは理路整然としている。ごみが散乱している様子もなく、予想外にきれいである。

✕

司馬遼太郎、台湾紀行によると、“たかお”は、もとは山人(原住民)の地名だった。サッポロがアイヌ語であることと同じである。清朝以前、ここにあった山人の集落タアカオ社からきている。おそらく、十七世紀ごろの漢人が、山人から“タカ

E . S . S . A . Y

第66回台湾外科学会に参加して

東京女子医科大学 消化器外科 山本 雅一

写真：Miin-Fu Chen 先生と著者(右)



カオ”という発音をきいて「打狗」(タアカオと発音する)という漢字を当てたかと思える。狗(イヌ)を打つなどという字を最初に当てた人は、よほど虫の居所が悪かったに違いない(台湾紀行からの抜粋)。

✕

宿泊の高雄国賓大飯店(カオシュンアンバサダーホテル)は愛河のほとりにあり、周辺にはしゃれたカフェが立ち並ぶ。夜はネオンが美しく、さながら上

海、外灘の小型版である。最近まで愛河は汚染されていた。高雄の人たちの努力により、今は魚が戻っている。愛河は高雄の人たちの誇りである。

ホテルで一息ついた後には、学会主催の夕食会である。台湾外科学会は、日本の外科学会以上に多くの外科がひとつにまとまっている。泌尿器科、整形外科、眼科、耳鼻科、脳外科なども含まれていた。夕食会には学会の中心で活躍している人た

ちが集まっていた。料理は蘇州料理と言っていた。日本での中華料理よりも味が薄い。宴会というと乾杯である。もちろん紹興酒。砂糖のついた梅干を入れて飲む。しかし、驚いたことに、今回は宴会全体を通じて赤ワインであった。ビールも出ない。台湾では酒に定番はないと聞いた。

台湾でお酒を飲むときには自分から決して飲んではいけない。まず、相手を探す。次に目で合

図して、酒のグラスを挙げて乾杯の合図をする。乾杯は字のごとく、杯を飲み干すということで、本来は杯のすべての酒を飲まなくてはならない。今では“随意”といって、少し口をつけることも許されている。テーブルに同席したすべての人たちが、あいさつを交わしながら、乾杯を繰り返す。会は次第に和やかな雰囲気に入れられ、別のテーブルからも人が来て、乾杯を繰り返した。知らぬ間に、カラオケ大会となった。私も台湾大学の林教授とテレサテンの“時の流れに身を任せ”を日本語で熱唱した。台湾の先生たちは人を載せるのが上手い。舞台上次々と先生方が上がり始めると、後ろの席から少しずつ参加者は退席し、自然解散というような感じであった。

✕

学会当日である。会場は市内の大病院の中の講堂である。講堂のわきは、ショッピングセンターのようであり、病院内とは感じられない。台湾外科学会前理事長、長庚紀念医院林口総院院長 Miin-Fu Chen 先生に司会をしていただいた。約1時間の講演、60枚のスライドと5分間のグリソン鞘一括処理による系統的肝区域切除のビデオである。これまで私が20年来携わってきた小肝細胞癌の臨床病理学的な研究と、肝癌の発育進展、グリ



高雄遠景

ソン鞘一括処理による系統的肝区域切除を示した。台湾の肝細胞癌においてはC型肝炎の比率が30~40%、B型肝炎の比率が40~50%とB型が多く、日本とは大きく異なっている。したがって、C型肝炎における小型肝細胞癌の話がどこまで受け入れられたか。最近、小さな肝細胞癌はラジオ波の治療効果が高いことが知られている。時間の制限からその部分に触れることができなかった。講演修了後、台湾の若い外科医から“excellent lecture!”と声を掛けていただいた。お世辞でもうれしい。

講演後は、高雄長庚病院外科沈教授主催の昼食会である。驚いたことに街中のイタリアレストランであった。シェフはイタリアで賞を取ったとあいさつした。台湾での会食で中華料理以

外であったのは初めての経験である。台湾の食文化も大きな変化が起きていることを感じた。

昼食後市内観光。瞬く間に時間が過ぎる。市内の小高い丘から、市内および高雄港を望む。春というより、初夏の日差しの中で、市民はのんびりとジュースを飲みながらくつろいでいた。なんとも穏やかな日曜日の昼下がりである。しかし、この丘の草むらには台湾海峡に向けて砲台が隠されている。また丘の頂上にはレーダーがあり、台湾海峡での有事の際には、ここが軍事拠点になると聞かされた。台湾人の心の奥底の不安感を垣間見た。

夕食は海鮮料理であり、澎湖島付近の郷土料理という説明があった。車えびのさしみ、巨大なかに料理（台湾海峡にいる大

きなかにで名前は分からない) 酢漬けのきゅうりと魚を煮た料理、タコとニンニクの茎をいためた料理、ぶたのあごの肉の料理、ヘチマのてんぷらなど今まで食べたことのない料理が並んだ。いずれも素朴な味である。紹興酒を飲まなくては、台湾に来た気がしない。梅干砂糖入りの紹興酒とレモン入りの紹興酒を交互に飲む。台湾料理には紹興酒が良く似合う。乾杯を繰り返しながら、和やかに会は閉会となった。

宴会のなかで、何度も日本のことが話題になった。誰が相撲で勝ったのか。プロ野球が始ま

ったことなど、日本人より良く知っている。また、日本のテレビドラマも人気であると聞いた。台湾の人たちは、日本人が台湾の人たちに感じる以上、日本に対して親近感や情報を得ているように感じた。世界は実に狭い世界となった。自分の組織、自分の国の中だけで発言していても、取り残されるばかりである。積極的に自分の意見を述べて、意見を交換していく姿勢を示すことが必要である。アジアのリーダーとしてというよりは、アジアの一員として日本に何ができるのか。異文化の尊重と共に生きる姿勢がキーワードと感じ

た。

✕

再び機中である。高雄成田間は約3時間。朝8時の出発なので、ホテルを6時に出る。高雄長庚病院外科の李先生の見送りを受けた。次はいつ来ることができるのか。緊張が解け、知らぬ間に意識が遠のいた。

